

<論文>

## アルタイ型言語における名詞・形容詞の述語的性格について The Predicative Function of Nouns and Adjectives in Altaic-type Languages

風間 伸次郎  
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

**要旨:** 本稿はトルコ語とモンゴル語, 朝鮮語を対象とし, これら3言語の名詞・形容詞の述語性の強弱を対照する。聞き出しによる調査の結果, 下記の4点を明らかにした。

1. 同じ形容詞名詞型言語でも, モンゴル語よりトルコ語の方が (特に名詞述語に比べて) 形容詞述語の述語性が低い。
2. トルコ語で述語性の低い述語を文中で用いる際にはもっぱら *ol-* 「なる」が用いられるが, モンゴル語では *ge-* 「という」や *baj-* 「ある/いる/である」も用いられる。
3. 形容詞名詞型のトルコ語, モンゴル語では人間名詞が主語の場合, 形容詞による斜格名詞項の支配は避けられ, 動詞述語を用いるが, 2つのモノゴトの相互的な関係を表す文では形容詞による斜格名詞項の支配が観察できる。
4. 述語の種類を問わない副詞項が修飾する場合にも, トルコ語, モンゴル語には形容詞述語を避ける傾向がある。特にモンゴル語では, 時間的な限定のある場合に形容詞述語による文終止が避けられ, コピュラ類の動詞が加えられる。

**Abstract:** This paper focuses on Turkish, Mongolian, and Korean, contrasting the degrees of predicative function of nouns and adjectives across these three languages. Based on the results of elicitation, the following four points have been clarified:

1. Even among languages of the same adjective-noun type, the predicativity of adjectival predicates is lower in Turkish than in Mongolian (especially when compared to nominal predicates).
2. In Turkish, when using predicates with low predicative force, the verb *ol-* 'to become' is primarily employed. In contrast, Mongolian also utilizes *ge-* 'to say/to be called' and *baj-* 'to be/to exist/to be (copula)'.
3. In the nominal-adjectival type languages, Turkish and Mongolian, when the subject is a human noun, case assignment of an oblique nominal argument by an adjective is avoided, and a verb predicate is used instead. However, in the case of a reciprocal relationship between inanimate objects, the case assignment of an oblique nominal argument by an adjective can be observed.
4. There is a tendency in both Turkish and Mongolian to avoid adjective predicates when modified by an adverbial argument that is indifferent to the type of predicate. Specifically in Mongolian, when there is a temporal restriction, the sentence-final use of an adjective predicate is avoided, and a copular verb is added.

**DOI:** <https://doi.org/10.15026/0002001453>

**キーワード:** アルタイ型言語, 名詞述語, 形容詞述語, 格支配, コピュラ

**Keywords:** Altaic-type languages, noun predicate, adjective predicate, case assignment, copula



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

## 1. はじめに

世界の諸言語には、名詞・形容詞の述語的性格（以下では「述語性」とする）が強い言語と、弱い言語があるものと考えられる。例えばスライアモン・セイリッシュ語では不変化詞以外の語は広くそのまま述語となるようである。したがって形容詞はもちろん、(語根レベルで)名詞と動詞の区別があるかどうかについても問題となる。形容詞的意味の語が動詞と同じような活用で過去形になるのはもちろん、名詞的な意味の語も過去になり得るという：q'ətxw-ul.：燃える-過去「それは燃えた」；man'-ul.：父-過去「亡父」(渡辺 (2012: 106))。

これに対して例えば英語のような言語では、動詞はそのまま単独で述語となり、過去形になることもできるが、形容詞や名詞は述語として直接過去になることはできず、be 動詞の助けを借りて過去の表現を形成しなければならない：It burned.「それは燃えた」；He was young.「彼は若かった」；He was my friend.「彼は私の友達だった」。

東アジアのアルタイ型言語(風間 (2022: 32-33))に目をやると、アルタイ諸言語の形容詞は名詞的(実詞の下位範疇)であるのに対し、朝鮮語の形容詞は動詞的(用言の下位範疇)で、日本語においてはイ形容詞は動詞的、ナ形容詞(いわゆる形容動詞)は名詞的な性格を示す(風間 (2022: 34-35))。

名詞・形容詞の述語性の強弱を判断する基準は大きく分けて2つ考えられる。1つは対象言語の名詞・形容詞が文中で用いられるさまざまな場合に「どの程度 be 動詞のような助動詞を必要とするか、そしてその助動詞はどの程度の変化を示すか」という点である。もう1つは対象言語の名詞・形容詞(そのうち特に形容詞)が「主格名詞以外にどれぐらい斜格名詞を支配できるか」という点である。したがって本稿では「I. 名詞述語・形容詞述語におけるコピュラ類の動詞の必要性とその変化」と「II. 格支配」の2部に分けて論述を進めていくことにする。ただし名詞による斜格項の支配はあまり観察されないので、「II. 形容詞述語による格支配」では形容詞による格支配のみを扱う。

本稿ではトルコ語とハルハ・モンゴル語(以下では単に「モンゴル語」とする)、朝鮮語を対象とし(以下ではこの3言語を本稿の「対象言語」と呼ぶ)、聞き出しによってこれら3言語の名詞・形容詞の述語性の強弱を対照することを目的とする。聞き出しに使用する例文は日本語であるので、これらの対象言語と日本語の異同についてもある程度の知見が得られるものと考えられる。なお言語名には以下の略号を用いる(T: トルコ語, M: モンゴル語, K: 朝鮮語)。

どの言語も(否定の要素などを除けば)日本語とほぼ同様の語順を取るため、調査結果の例文の提示に際しては、基本的に日本語による逐語訳のみを付し、詳細なグロスは省略した。ただし、日本語に翻訳しにくい対象言語特有の文法的要素に関しては、一部グロスによって示した(トルコ語における不定標示 bir: INDEF, モンゴル語における3人称所有小辞 n': 3POSS である)。

### I. 名詞述語・形容詞述語におけるコピュラ類の動詞の必要性とその変化

#### 2. コピュラ類の動詞の必要性に関する先行研究

まず本稿の対象言語のうち、トルコ語とモンゴル語の形容詞は名詞的な振る舞いをし、朝鮮語の形容詞は動詞的な振る舞いをする。したがってトルコ語とモンゴル語の形容詞述語が否定や過去で用いられる時には基本的に名詞述語が否定や過去で用いられる時と同じ形式をとる(否定は T: değil, M: biš, 過去は T: idi~(y)dİ<sup>1</sup>, M: bajsan)。肯定現在であれば特にコピュラに類する形式を必要としない。一方、朝鮮語の名詞述語は(朝鮮語学で指定詞と呼ばれる)コピュラ(i-)を否定や過去にするが、形容詞述語は(アスペクト的な振る舞いは若干異なるものの)動詞と同じような活用を示す。以上の点に関してはさらに風間 (2022: 34-35, 423-450) も参照されたい。

<sup>1</sup> 形態素の表示における大文字は母音調和による異形態の代表形であることを示す。以下も同じ。

次に必要な背景知識として、対象言語で用いられる助動詞について述べておく。

名詞述語／形容詞述語の述語性を補う必要がある場合に、トルコ語は *ol-*「なる」もしくは不完全動詞（／欠如動詞）*i-* を、モンゴル語は *bol-*「なる」（さらには *baj-*「いる／ある」、*ge-*「言う」）もしくは不完全動詞 *bö-*（現在では使用されていないコピュラ *bö-* に由来する形式）を用いることがある。朝鮮語で名詞述語を作る際には、動詞 *ha-*「する、言う」もしくは指定詞 *'i-*「～である」が用いられる。*'i-* は形容詞とほぼ同じ変化をするが、一部で特殊な変化形を持つため別品詞（指定詞）とされている（菅野他（編）（1988: 1009））。

モンゴル語の *ge-*「言う」や朝鮮語の *ha-*「する、言う」のような意味の動詞も含まれているが、以下本稿では対象言語におけるこれらの動詞を広く「コピュラ類の動詞」と呼ぶことにする。どのようなコピュラ類の動詞が、どの言語でどの程度用いられるかが問題となる。したがって、本稿は一方で名詞・形容詞の述語的性格を研究するものであるが、他方で東北アジアのアルタイ型言語におけるコピュラ類の種類と機能、使用範囲を対照しつつ研究する目的を有した論考である。

先行研究には、特に2つ以上の名詞述語／形容詞述語を用いる際に、どのような接続の形式をとるか、主語や時制が異なる場合にどのような表現をとるかについて興味深い指摘を行っているものがある。以下では主にトルコ語について林（2013）、モンゴル語について岡田・向井（2006）を参照する。なおコピュラ類の動詞や接続詞は太字で示す。

## 2.1. トルコ語についての先行研究

林（2013: 199, 203）によればトルコ語において名詞述語を連体修飾節や名詞節にするためには、*ol-*「なる」の形動詞形を使うという。形容詞述語を名詞節にするためにも *ol-*「なる」の形動詞形が用いられる。

*bu okulun öğrencisi olan çocuk*  
この 学校の 生徒 である 子供

*Ali'nin çocuk olduğu*  
アリが 子供 である（あった）こと

*Ali'nin küçük olduğu*  
アリが 小さい（小さかった）こと

林（2013: 207）にはさらに名詞述語が連用的な形になる場合に *ol-*「なる」の副動詞形を用いている例が見いだされる。すなわち、動詞 *ol*「なる」に *-(y)ArAk* が付いた *olarak* という形が「～として」という意味で多用されるという。

*O, bir manken olarak çok zayıf.*  
彼（女）は モデル としては とても 痩せている。

## 2.2. モンゴル語についての先行研究

Kullmann and Tserenpil（1996: 195）では形容詞が述語になる際のコピュラの必要性について次のように述べている（筆者要約による）。

コピュラが必要かどうかは、形容詞を通して表されることの意味が永続的か一時的かによる。一時的であればコピュラが必要であり（下記の例の a）、永続的であればコピュラは必要ない（下記の例の b）。いくつかの形容詞は一時的なものに（下記の例の 2a-3a）、他の形容詞は永続的なものに（下記の例の 4b）用いられる傾向にある。5b では *always* という語が恒常形動詞形の *-dAg* を伴うコピュラ *baj-* を要求して

いる。

- 1a) Tany malgaj žizig **bajna**. 「あなたの帽子は小さいね。」  
 1b) Ene malgaj (bol) žizig. 「この帽子は小さい。」  
 2a) Bi ölsögölön **bajna**. 「私はお腹が空いている。」  
 3a) Ene zurag xazgaj **bajna**. 「この絵は傾いているなあ。」  
 4b) Ter xojor xüüxen (bol) carajlag. 「あの2人の女性は美しいです。」  
 5b) Ene uul dandaa castaj **bajdag**. 「この山はいつも雪がある。」

名詞述語から名詞節を形成するのにコピュラ類の動詞を必要とする、とする記述がある。

モンゴル語に関して、岡田・向井 (2006) は次のように述べる (筆者要約による、グロス等も補った)。

疑問代名詞を持つ質問文は、述語を形動詞形にすることによって名詞節にすることができ  
 る: *xezee ir-sn-ijg: when come-PTCP.PFV-ACC* 「いつ来たかを」。ただし名詞述語文から名詞節「～  
 であるか」を作ることにはできず、動詞 *ge-* 「～と言う」や *bol-* 「～になる」などを使わねばなら  
 ない。

Ene duguj jaagaad minijx **boloxyg** tajlbarlasan.  
 この 自転車 なぜ 私のもの であるかを 説明した。  
 Ene mašin xenijx **boloxyg** bi asuusan.  
 この 車が 誰のもの なのかを 私は 訊いた。

名詞述語や形容詞述語を並列する際に、コピュラ類の動詞を必要とする、とする記述がある。特に、  
 名詞述語であれ形容詞述語であれ、措定文である場合にコピュラ類の動詞を必要とする、という。

モンゴル語について岡田・向井 (2006) は次のように述べる (要約による、以下も)。

措定文「Aの属性はBである」のBが複数の場合、同位成分の並列ではなく重文になり、接  
 続詞 *bögööd* (不完全動詞 *bö-* の副動詞形: 筆者注) を用いる。

Marija ilbečin **bögööd** zurxajč.  
 マリヤは マジシャン で 占い師です。  
 一方、指定文では同位成分の並列であり、次の2つの方法のいずれかで表現される。  
 Minij mergežil xel šinžlel, avia züj xojor. [～A, B xojor]  
 Minij mergežil xel šinžlel **bolon**<sup>2</sup> avia züj. [～A bolon B]  
 私の 専門は 言語学 と 音声学 2つ。

形容詞述語が2つある場合も、措定文であるので、同位成分の並列ではなく重文になり、接  
 続詞 *bögööd* を用いる。並列の表現は使えない。

Ene öröö ceverxen **bögööd** toxilog.  
 この 部屋は 清潔 で 快適  
 ceverxen **bögööd** toxilog öröö  
 清潔 で 快適な 部屋  
 \*ceverxen **bolon** toxilog öröö  
 清潔 と 快適な 部屋

このことは、Bの部分が複数ある場合に「と」を使うか「で」を使うかが指定文と措定文と  
 で異なる日本語でも同じである。

<sup>2</sup> *bol-* 「なる」の非分離副動詞形である。

【池畑さんの仕事】は，【歌手】と【俳優】です。（指定文）

\* 【池畑さんの仕事】は，【歌手】で【俳優】です。

【池畑さん】は，【歌手】で【俳優】です。（措定文）

\* 【池畑さん】は，【歌手】と【俳優】です。

岡田・向井 (2006) によれば，モンゴル語では措定文・指定文に関わらず，テンスや主語が異なる2つの名詞述語文をつなぐ場合も，接続詞 *bögöod* による構文を用いるという。

Dondovdorž guaj tuxajñ üjed diputat bajsan **bögöod**  
 ドンドドルジ氏は当時代議員だったそれで，  
 odoo xüü n' gišüün bolloo.  
 現在はその息子が議員になった。  
 Aavyn nutag Xövsgöl **bögöod** eežijnx Arxangaj.  
 父の故郷はフブスグルで母のはアルハンガイです。  
 並列節が名詞述語文で主節が動詞述語文という組み合わせもある。

Bi cajnd durtaj **bögöod** bajnga uudag.  
 私はお茶が好きでいつも飲んでいます。

岡田・向井 (2006) は形容詞による名詞の修飾を単なる修飾語成分とは考えず，名詞述語文（措定文）が連体節になったものと考えている。

次のような例では一見，形容詞が単独で修飾語になっているかのように見える。

Ene oron bajan. この国は豊かです。 > bajan oron 豊かな国

しかし，名詞を修飾する形容詞は自分自身の補語をとることも可能であるし，テンスが変われば補助動詞も現れるので，そのような場合は名詞述語文（措定文）の述語と区別することが困難になる。

Ene oron malaar<sup>3</sup> bajan. この国は家畜が豊かです。 > malaar bajan oron 家畜が豊かな国

Ene oron bajan bajsan. この国は豊かでした。 > bajan bajsan oron 豊かだった国

したがってモンゴル語で名詞を修飾している形容詞は，修飾語成分ではなく，あくまでも名詞述語文（措定文）が連体節になったものと見なす。

### 3. 研究方法

下記の調査例文を用いた聞き出しによって対象言語における表現を調査した。コンサルタントは下記の方々である。コンサルタントはどの方も日本語が堪能であるので，日本語から対象言語の話し言葉で最も自然な表現に訳していただいた。なおコピュラ類の動詞は文語的な表現の方が現れやすいと考えられるため，口語的な表現と文語的な表現の両方を訊いた。

表1：コンサルタントの情報

対象言語	生年	言語形成期を過ごした場所
トルコ語	1996	アンカラ，イスタンブール
モンゴル語	1989	ウランバートル
朝鮮語	1978	慶尚北道醴泉郡

<sup>3</sup> malaar は mal 「家畜」の具格形である。

上記の先行研究の例文を参考に、次のような調査例文を作成して使用した。

<1> 名詞述語や形容詞述語から名詞節や連体修飾節、副詞節をいかに作るかを調査する例文

(1) この自転車がなぜ私のものであるかを説明した。／(2) この車が誰の車なのかを私は訊いた。／(3) ここにいるのは全員、この学校の生徒である子供たちなんです。／(4) [人名] が優しい子供であることは私も知っています。／(5) [人名] の息子がまだ小さいことは私は知りませんでした。／(6) あの頃はまだ [人名] の息子が小さかったことを私はよく覚えています。／(7) 彼 (女) はモデルとしてはとても痩せている。

<2> 名詞述語文 (指定文・措定文) および形容詞述語の並列を調査するための例文

(8) [人名] の職業は歌手と俳優です。／(9) [人名] は歌手で俳優です。／(10) この部屋は清潔で快適です。／(11) 昨日私が泊まったのは、とても清潔で快適な部屋でした。

<3> 異主語や異なる時制での述語性の表現を調査するための例文

(12) 父の故郷は [地名] で母のは [地名] です。／(13) [人名] は当時その会社の社長で、現在はその息子が社長になりました。／(14) 昔、この国は豊かでした。／(15) 激しかった雨がやっと小降りになった。

<4> 形容詞による名詞項の支配の可不可を調査するための例文

(16) この国は果物が豊かです。／(17) トルコは果物が豊かな国です。

人名や地名は各言語において適切なものに代えた。一部、名詞も違う語になっている例があることをことわっておく。なお例文番号は各言語でも同じものを使用した。

#### 4. 研究結果

用いられたコピュラ類の動詞や接続詞類は太字で示した。形容詞自体や格など注目すべき要素には下線を施したのものもある。特に注記のないものは (特に本稿で問題とする点に関して) 口語表現と文語表現の間に違いがなかったものである。違いがあった場合には口語であるか文語であるかを示す。

以下では「4.1. 名詞述語・形容詞述語からの名詞節・連体修飾節・副詞節の形成」, 「4.2. 名詞述語文 (指定文・措定文) および形容詞述語の並列」, 「4.3. 異主語や異なる時制での述語性の表現」 「4.4. 形容詞による名詞項の支配の可不可」の4つの観点から調査した結果を順にみてゆくこととする。

##### 4.1. 名詞述語・形容詞述語からの名詞節・連体修飾節・副詞節の形成

まず名詞述語や形容詞述語から名詞節や連体修飾節、副詞節を作るのにはどのようなコピュラ類の動詞が必要かを確認した。

###### 4.1.1. トルコ語

トルコ語で名詞述語から疑問代名詞のある選言的な名詞節を作るには *ol-*「なる」が用いられた。ただし次の文では形容詞 *ait* 「～に関する, ～に属する, ～のための, ～に関わる」も用いられた。

(T1) Bu bisikletin neden bana ait **olduğunu** açıkladım.  
この 自転車が なぜ 私に 属する (と) なったのかを 説明した。

(T2) Bu arabanın kimin arabası **olduğunu**, ben sordum.  
この 車が 誰の 車 (と) なったのかを 私は 訊いた。

先行研究では, トルコ語において名詞述語/形容詞述語から連体修飾節を作るためには *ol-*「なる」の形動詞形が使われるとされていた. コンサルタントによる表現でもやはり先行研究通り *ol-* の変化形が観察された. さらに補文節でも *ol-*「なる」の形動詞形が用いられることが確認できた.

- (T3) Buradaki herkes bu okulun öğrencisi **olan** çocuklardır.  
 ここにいる 全員 この 学校の 生徒 である 子供たちです.
- (T4) Ahmet'in hoşgörülü bir çocuk **olduğunu** ben de biliyorum.  
 アフメットが 優しい INDEF 子供 (と) なったのかを 私 も 知っている.
- (T5) Ali'nin oğlunun henüz küçük **olduğunu** ben bilmiyordum.  
 アリの 子供が まだ 小さい のだったことを 私は 知りませんでした.
- (T6) O zamanlar Ali'nin oğlunun hala küçük **olduğunu**  
 あの 頃 アリの 息子 まだ 小さい (と) なったのかを  
 ben iyi hatırlıyorum.  
 私 よく 覚えている

副詞節を作るのに先行研究の指摘にあった *olarak* は用いられず, *için*「ために, ためには」による表現の回答を得た.

- (T7) O bir manken *için* oldukça zayıf.  
 あの人は INDEF モデル のためには とても 痩せている.

#### 4.1.2. モンゴル語

モンゴル語で疑問代名詞のある選言的な名詞節を作るには *ge-*「～と言う」や *bol-*「～になる」を用いることが確認できた. なお(M1), (M2)が口語的表現, (M1'), (M2')が文語的表現である.

- (M1) Ene duguj jaagaad minijx ve **gedgijg** tajlbarlasan. (口語)  
 この 自転車 なぜ 私のもの か ということを 説明した.
- (M1') Ene duguj jaagaad minijx **boloxyg** tajlbarlasan. (文語)  
 この 自転車 なぜ 私のもの なのかを 説明した.
- (M2) Ene xenij mašin be **gedgijg** asuusan. (口語)  
 これが 誰の 車 か ということを 訊いた.
- (M2') Ene mašin xenijx **boloxyg** bi asuusan. (文語)  
 この 車が 誰の なのかを 私は 訊いた.

モンゴル語において, 連体節の方は「生徒である子供たち」でなく「生徒である」と翻訳されたため, 名詞述語を連体修飾成分に用いるための形は得られなかった. 補文節の方は *ge-*「言う」の恒常形動詞形を用いて表現された.

- (M3) End xuran cuglaad bajгаа n'  
 ここに 集い 集まって いるのは 3POSS  
 бүгд enexүү surguulijn suragčид jum.  
 皆 この 学校の 生徒 なのだ.
- (M4) Bajaryg ejeldeg aаштай xүүхэд **gedgijg** bi č medne.  
 バヤルが 優しい 性格の 子 ということを 私 も 知っている.

形容詞について, 現在の状況は主節の動詞が *med-*「知る」であったためか引用節によって表現された.

過去の状況は baj- 「いる／ある」の完了形動詞形を用いて表現された。

(M5) Bajaryn xüüg tijm balčir gež medseñgüj.

バイラルの子がそんなに幼いと知らなかった。

(M6) Tuxajñ üjed Bajaryn xüü balčirxan bajsnýg bi tod sanaž bajna.

その頃バイラルの息子幼いだったのを私よく覚えている。

モンゴル語における逆接の副詞節の形成にはコンピュータ類の動詞 baj- が用いられた。

(M7) Zagvar ömsögč bajsan č dendüü turanxaj bajna.

モデルであった(それでも)もすごく痩せている。

#### 4.1.3. 朝鮮語

朝鮮語で疑問代名詞のある選言的な名詞節を作るには指定詞が用いられる。

(K1) 'igoi 'wai nai jajongɔ='inji sərmýonghaiss'ɔ'yo.

これがなぜ私の自転車であるか説明した。

(K2) 'i caga nugu gɔ=nji (< gɔs='inji) murɔss'ɔ'yo

この車が誰のものなのかを訊いた。

朝鮮語では連体節の方は「生徒である子供たち」でなく「生徒である」と翻訳されたため、名詞述語を連体修飾成分に用いるための形は得られなかった。補文節の方は指定詞 'i- によって表現された。形容詞述語を動詞の項として用いるためには、形容詞自体の連体形で形式名詞を修飾させて名詞項を形成することによって表現された。

(K3) 'yɔgi 'issnũn 'a'idur'un modu 'i haggýo hagsaing='i'ɔi'yo.

ここにいるの子たちは全員、この学校の生徒なんです。

(K4) cɔrsuga caghan a'iranũn (< 'a'i='iranũn) gɔn jɔdo 'ar'a'yo.

チョルスが優しい子供であることは私も知っています。

(K5) cɔrsu 'adur'i 'ajig 'ɔrin jur'un mɔrrass'ɔ'yo.

チョルスの息子がまだ小さいことは知りませんでした。

(K6) guddainũn 'ajig cɔrsu 'adur'i 'ɔryɔssdɔn gɔrro gi'ɔghago 'iss'ɔ'yo.

あの頃はまだチョルスの息子が小さかったことを覚えています。

副詞節は助詞 =rosɔ 「として」もしくはコンピュータ類の動詞 ha- によって表現された。

(K7) gu saram'un { modɔir=rosɔ=nũn / modɔir'ur hagi'ɔinũn } nɔmu marrass'ɔ'yo.

あの人は { モデルとしては / モデルと 言うには } あまりに痩せている。

### 4.2. 名詞述語文（指定文・措定文）および形容詞述語の並列

#### 4.2.1. トルコ語

次に、指定文の名詞述語を並列する場合、トルコ語では接続詞 ve が用いられた。なお ve はアラビア語由来の要素である（竹内 (1989: 397)）。

(T8) Ahmetin mesleđi şarkıcılık ve oyunculuk(tur).

アフメットの職業は歌手と俳優です。

さらに措定文でも接続詞による並列表現が用いられた.

- (T9) Ahmet şarkıcı ve oyuncu.  
アフメットは 歌手 と 俳優です.

形容詞でも接続詞による並列表現が用いられた. なお(T11)で得られたのは下記の文で, 連体修飾の例として得ることはできなかった.

- (T10) Bu oda temiz ve rahat(tır).  
この 部屋は 清潔 と 快適です.
- (T11) Dün benim kaldığım oda oldukça temiz ve rahattı.  
昨日 私が 泊まった 部屋は, とても 清潔 と 快適でした.

#### 4.2.2. モンゴル語

モンゴル語に関して, 先行研究はモンゴル語の指定文は [~ A, B xojor (two)] もしくは [~A bolon B] のような構造により同位成分の並列で表現されるとしていた. コンサルタントによる表現では, xojor, bolon のいずれの形式も用いられず, 単なる並列で表現された.

- (M8) Doržijn mergežil n' duučin, žüžigčin.  
ドルジの 職業 3POSS 歌手, 俳優.

先行研究にはモンゴル語の措定文「A の属性は B である」において B が複数存在する場合には, (指定文に見られたような) 並列ではなく重文で表現され, bögöod を用いるという指摘があった. しかしコンサルタントから得られた文は口語的/文語的のいずれも並列による表現であった. なお(M9)は動詞述語による表現である.

- (M9) Dorž duulna č, žüžiglenc č. (口語)  
ドルジは 歌う し, 演技する し.
- (M9') Dorž duučin bas žüžigčin. (文語)  
ドルジは 歌手 さらに 俳優.

一方, 形容詞述語の場合, 文語表現ではコンサルタントはコピュラ類の動詞を起源とする接続詞 bögöod を用いた表現を提示した. 文末にもコピュラ類の動詞が用いられる. なお口語の(M10)では形容詞述語が並列されているが, 文語の(M10')では形容詞の連体修飾による文となっており, 文の構造も異なっている.

- (M10) Ene öröö ix ceverxen, tuxtaj jum. (口語)  
この 部屋 とても 清潔 快適なのだ.
- (M10') Ene cever bögöod tuxtaj öröö bajna. (文語)  
これは 清潔 で 快適な 部屋 である.

形容詞の連体修飾においても, 単なる並列は使われる. 下記の例文は過去のできごとであるため, 文末にはコピュラ類の動詞が用いられている.

- (M11) Öčigdrijn xonoson öröö ix ceverxen, tuxtaj öröö bajsan.  
昨日の 泊まった 部屋は とても 清潔 快適な 部屋 だった.

### 4.2.3. 朝鮮語

朝鮮語の指定文の並列では ha-「する」の副動詞形が用いられた。なおこの hago は助詞「〜と」としても辞書（油谷他（編）（1993））に立項されている。

(K8) corsu jigəb'un gasu=hago bayu'yoi'yo.  
 チョルスの 職業は 歌手と 俳優です。

朝鮮語の措定文の並列は指定詞の接続形で表現される。

(K9) cərsunun gasu='ija bai'ui'oi'yo.  
 チョルスは 歌手で 俳優です。

形容詞の並列においては、朝鮮語では形容詞自体が接続形式になる。

(K10) 'i bang'un ggaiggushago kwaijəghai'yo.  
 この 部屋は 清潔で 快適です

形容詞が名詞を修飾している場合にも同様に形容詞自体が接続形式になる。

(K11) 'əjəi jəiga məmun gos'un  
 昨日 私が 泊まった 所は,  
 jəngmar ggaiggushago kwaijəghan bang'i'əss'o'yo.  
 本当に 清潔で 快適な 部屋でした。

## 4.3. 異主語や異なる時制<sup>4</sup>での述語性の表現

### 4.3.1. トルコ語

トルコ語では、主語が異なる場合に、指定文でも措定文でも不完全動詞が述語性を補うように用いられた。ただし指定文の場合、口語では単なる並列も用いられた。

(T12) Babamın memleketi Ankara, anneminki İzmir. (口語)  
 私の父の 故郷は アンカラ, 私の母のは イズミル.  
 Babamın memleketi Ankara'dır, annemin ise İzmir'dir. (文語)  
 私の父の 故郷は アンカラです, 私の母 の方は イズミルです。

(T13) Ahmet o zamanlar şirketin patronuydu, şimdi oğlu  
 アフメットは その 頃 会社の 社長だった, 現在は その息子が  
 patron oldu.  
 社長に なった。

文末述語である形容詞の過去形は不完全動詞 i- を語幹とした過去によって示される。

(T14) Eskiden bu ülke bolluk içindeydi.  
 昔から この 国は 豊か なのだった。

<sup>4</sup> 本節では時制の違いを調査するのが目的であったが、用意した例文は(11)が指定文、(12)が措定文であり、「時制が同じか異なるか」と「指定文か措定文か」が交絡している。(13)は単文の形容詞述語の文になっている。(14)は異なる時制の例ではあるが、名詞修飾節と主節を比べており、岡田・向井(2006)で挙げられているような「テンスが異なる2つのコピュラ文をつなぐ場合」とは異なっている。したがって全体として「異なる時制」の検討は十分にできていないと言える(以上の点は査読者のお一人から指摘をいただいた)。時制の違いについての十分な分析はなお今後の課題である。

一方, 形容詞の示すテンスが主節のそれと異なり, 主節に対して過去のできごとであっても, 特にその過去を示すコピュラ類の動詞は用いられなかった。

(T15) *Siddetli yağış sonunda sakinleşti.*  
 激しい 雨が やっと 静まった。

なお日本語において一般に複文における修飾節などで形容詞のテンスは中和するが (「{幼い/幼かった} 時に見たテレビドラマだった。」), 主節の状況に対して異なる過去の状況を問題にする際には過去形の使用が必要となる (「{\*激しい/激しかった} 雨がやっと小降りになった」)。

#### 4.3.2. モンゴル語

先行研究によれば, モンゴル語では措定文・指定文に関わらず, テンスや主語が異なる2つの名詞述語文をつなぐ場合には接続詞 *bögööd* による構文を用いるとされていた。コンサルタントの訳によれば, 文語で *bögööd* が用いられたが, 単なる並列も用いられた。

(M12) *Aavyn törsön nutag Ulaanbaatar, eežijnx Darxan xot.*  
 父の 生まれた 故郷は ウランバートル 母のは ダルハン 街です。

(M13) *Bajar tuxajñ üjed tus kompanijn zaxiral bajsan*  
 バヤルは その 頃 この 会社の 社長 だった  
*bögööd odoo tüünij xüü zalgamžlaad bajna.* (文語)  
 そうして 現在は その 息子が 引き継いで いる。

文末の名詞述語を過去のこととして表現するには *baj-* の完了形動詞形に拠った表現が用いられた。

(M14) *Ömnö n' ene ix bajan uls bajsan.*  
 以前 3POSS これは とても 豊かな 国 だった。

文語では現在と異なる状態であるはずの形容詞が現れたが, コピュラ類の動詞によって過去のこととして表現されることはなかった。

(M15) *Boroo araj namdaž bajna.* (口語)  
 雨は やっと 静まって いる。  
*Širüün boroo araj gež namdaž bajna.* (文語)  
 激しい 雨が どうか と 静まって いる。

#### 4.3.3. 朝鮮語

朝鮮語では指定文の名詞述語, 措定文の名詞述語を問わず指定詞により表現された。

(K12) *'aboji gohyang'un so'ur='igo 'omöninun busan='i'oi'yo.*  
 父の 故郷は ソウルで 母は プサンです。

(K13) *čorsuntun dangsi'oi gu hoisa sajang='i'ossgo*  
 チョルスは 当時 その 会社の 社長で,  
*jigum'un 'adur'i sajang='i'oi'yo.*  
 現在は 息子が 社長です。

朝鮮語の文末述語の形容詞の過去は、形容詞自体の過去形によって示される。

(K14) 'yɔinar'ɔi 'i naranun pung'yorow'ɔss'ɔ'yo.  
昔、この国は豊かでした。

主節と異なる時制を持つ文中の形容詞述語では、形容詞自体を過去形にはせず連用的な形に変え、動詞 *nairi*-「降る」を補ってこれを過去形にした表現が得られた。

(K15) saicagoi *nairidon* *biga* 'ijoi'ya 'yaghajjɔss'ɔ'yo.  
激しく降っていた雨がやっと弱くなった。

#### 4. 4. 形容詞による名詞項の支配の可不可

ここではモンゴル語の先行研究で指摘されていた名詞修飾の形容詞が名詞を支配する現象についての対照を行う。

##### 4. 4. 1. トルコ語

トルコ語では形容詞が項を支配する表現は現れなかった。

(T16) *Bu* *ülkenin* *meyvesi* *bol*(dur).  
この国の果物豊か(だ)。

なお次の文は一種の二重主語文のような構造になっている。

(T17) *Türkiye* *meyvesi* *bol* *bir* *ülkedir*.  
トルコはその果物が豊かな INDEF 国である。

##### 4. 4. 2. モンゴル語

先行研究では、モンゴル語の形容詞はそれ自体が支配する名詞項を取ることが可能であるとしていた。これに対し、コンサルタントは口語表現で具格 (-AAr) の名詞項を支配する形容詞の例を示したが、連体修飾を避け述語形容詞とした。文語表現では *Propriative* (所有) によって派生した形容詞が用いられた。*Propriative* の接辞は句をスコープとする統語的派生接辞としての性格を有している(風間 (1996: 97))。

(M16) *Ene* *uls* *mal-aar* *bajan*. (口語)  
この国は家畜で富んでいる。  
*Ene* *uls* *mal* *süre**g* *ix-tej*. (文語)  
この国は家畜の群がたくさんだ。

次の調査例文では口語表現で *Propriative* による形容詞が、文語表現で形容詞による具格名詞の支配が観察された。

(M17) *Mongol* *maš* *ix* *mal-taj*. (口語)  
モンゴルは とても たくさんの 家畜がいる。  
(M17') *Mongol* *Uls* *mal* *sür**g*-*eer* *bajan*. (文語)  
モンゴル 国は 家畜の 群で 富んでいる。

##### 4. 4. 3. 朝鮮語

朝鮮語では、形容詞述語による二重主格構文が観察された。下記の 2 例において、*=num* は主題を示

す助詞, =i は主格を示す助詞である.

(K16) 'i nara=**nun** gwa'ir=**'i** **pungbuhai'**yo.  
この 国は 果物が 豊かです.

(K17) twiruki'yoi=**nun** gwa'ir=**'i** **pungbuh**an nara'yoi'yo.  
トルコは 果物が 豊かな 国です.

## 5. I 部のまとめ

聞き出しによる対照言語学的な調査の結果, 対象言語間における次のような違い (①②③) が明らかになった.

①同じ形容詞名詞型言語であっても, モンゴル語よりトルコ語の方が (特に名詞述語に比べて) 形容詞述語の述語性が低い.

その理由は下記の2点である.

1. トルコ語では措定文の名詞述語文の並列も形容詞述語文の並列も指定文における並列と全く同じように, 接続詞による並列で示すことができるが ((T9)-(T11)), モンゴル語の文語の形容詞述語文ではコピュラ類の動詞に由来する形式 *bögööd* の使用<sup>5</sup>が認められる ((M10')).
2. トルコ語で形容詞が名詞項を支配する表現は現れなかったが, モンゴル語では具格名詞を支配する例が現れた ((M16), (M17)).

このうち2.の根拠については, II 部において, もっと多くの形容詞について分析しこれを再検討する.

②トルコ語において述語性の低い述語を (従属的な資格において) 文中で用いる際に使われるのはもっぱら *ol-* 「なる」のみであるが, モンゴル語では特に補文節として解釈される際に *ge-* 「(と) いう」が用いられ, *baj-* 「ある, いる, ~である」もかなり用いられる.

③予想された事ではあるが, 形容詞動詞型である朝鮮語では名詞述語を文中で使用したり過去にする際には指定詞を用い, 形容詞述語はそれ自体が活用する. この点で形容詞名詞型であるトルコ語やモンゴル語とは大きく異なった性質を示す.

<sup>5</sup> 「*bögööd* というコピュラ類の形式を用いなければならないのであれば, むしろ措定文の名詞述語や形容詞述語の述語性は低いとみるべきではないか」という御指摘をいただいた. したがって岡田・向井 (2006) のような (単なる修飾ではなく) 述語による連体修飾としての性格は名詞/形容詞そのものの述語性というより, コピュラ類の述語を伴った名詞述語句/形容詞述語句のもつ述語性というべきものかもしれない. 岡田・向井 (2006) のような述語性は文語においてわずかに観察されたが, 口語ではほとんど観察されなかった. いずれにせよ本稿の分析も「1. はじめに」で述べたコピュラ類の必須性という点からはずれた分析結果になっている.

さらに他方で査読者の方からは「共時的に現在ではもはや *bögööd* の動詞語幹 *bö-* に生産性はなく, *bögööd* が単なる一語の接続詞と化しているのであれば, 先行する名詞・形容詞の述語性の高さとは無関係ではないか」という御指摘もいただいた. たしかに *bö-* の他の変化形としてはやはり文末小詞として化石化した *bölgöö* 「…であった」(*bö-* の完了形) があるのみなので, 接続詞とみなせばトルコ語の状況と違いは小さくなる. 動詞の変化形でないとなれば, 名詞述語句/形容詞述語句としての述語性もあまり強くないということになる.

したがって①の結論の根拠とした 1. は根拠として弱いものとなってしまっている. ただトルコ語の名詞述語と形容詞述語の両者はまったく同じような取り扱いを受けるのに対して, モンゴル語では若干異なった取り扱いを受けている点は明らかになったと言えるだろう.

## II. 形容詞述語による格支配

### 6. 形容詞述語による格支配に関する先行研究

まず本稿の対象言語の形容詞のとり格名詞についての先行研究をみる(6.1節)。しかし管見の限り、特にこの問題に特化して詳しく論じたものはないようだ。そこで次に、本稿の対象言語の調査表作成の目安とするためにも、形容詞のとり格について比較的詳しく研究している日本語についての先行研究を詳しく取り上げることにする(6.2節)。

#### 6.1. 本稿対象言語の形容詞述語による格支配に関する先行研究

トルコ語の形容詞に関して、Göksel, A. and C. Kerslake (2005: 201) では補語を取る形容詞としてその補語の格ごとに次の4種類を例示している:[1] 格なしの補語: su **dolu** kovalar「水が いっぱいの バケツ」、[2] 与格の補語: ödüle **layık** bir öğrenci「賞に ふさわしい INDEF 学生」、[3] 奪格の補語: öğrencilerinden **memnun** bir öğretmen「学生たちから 慕われている INDEF 先生」、[4] 具格の補語: karla **kaplı** sokaklar「雪で 覆われた 通り」。

モンゴル語の文法記述である Kullmann and Tserenpil (1996) および Janhunen (2012) には形容詞による名詞項の支配やその格についての記述は見いだせなかった。

朝鮮語の形容詞に関して、Sohn (2004: 235-236) では burabda「うらやましい」、musebda「怖い」、mibda「憎い」、johda「良い、好きだ」、silhda「嫌いだ」などの感覚や心理の形容詞や 'issda「ある/いる」、'ebsda「ない」、manhda「多い」、jegda「少ない」などの存在の形容詞は、動詞が対格の目的語を取るのとは異なり、主格の接語 =i/=ga の名詞項を取るとして次のような例を挙げている: na=nun noi=ga burabda。「私はおまえが うらやましい」; Mi'a=ga ca=ga obsda。「ミアが 車が ない」(ハングルからの翻字は本稿のものに変えた)。

#### 6.2. 日本語の形容詞述語による格支配に関する先行研究

小矢野 (1985) では日本語の形容詞がとり格の諸表現についてI~VIII節でガ/ヲ/ニ/ト/デ/カラ/マデ/ヨリのそれぞれ8つの格について例を挙げて分析している。各節の下位の節ではそれぞれの格をとった名詞がどのような意味関係で述語形容詞と結びついているかを示している。このうち「II. ヲ格名詞と形容詞との組み合わせ」については、「好悪・欲求の形容詞が感情の対象をヲ格で表わすこともある」と記述しているのみであるので、ここでは取り上げない。なお小矢野 (1985) は「1. 存在の主体の結びつき」のように項目名を記しているが、「~の結びつき」の部分は全項目に共通しているため、下記では省略した。

下記では本稿の調査票に用いた項目に関してのみ、その述語(形容詞/形容動詞)もしくは例文<sup>6</sup>を下線を付して示した。中でも調査票で用いた述語は太字とし、本稿の調査例文での例文番号も示した。なお述語の中には(表記を含め)形や語彙を調査例文においてはより一般的で頻度の高いものに変えたものもある。それらは斜字体とした。

I. ガ格: 1. 存在の主体/2. 性質・状態の主体/3. 属性の側面/4. 主観的な評価・判断を伴う性質・状態の主体「単純だ、簡単だ[1]、容易だ、平易だ、早い[2]、遅い、難しい[3]、正当だ、不当だ、相応しい、適当だ、似つかわしい」/5. 関係の主体/6. 態度の主体/7. 感情・感覚・能力の主体/8. 感覚を感じる場所/9. 感覚を生じさせる対象「傷が痛い[4]、傷跡がむず痒い[5]、太陽が眩しい」/10. 感情の向けられる対象「嬉しい[6]、楽しい、面白い、なつかしい、恋しい、悲しい、つらい、こわい」/11. 能

<sup>6</sup> 小矢野 (1985) では語例のみを示している場合と例文を示している場合の両方があるためである。

## 力・特性の発現する対象

III. ニ格：1. 存在の場所／2. 持主／3. 对人的な態度の向けられる対象「優しい[7], 親切だ, 甘い, 丁寧だ, 孝行だ, 忠義だ, よそよそしい, 失礼だ[8], 厳しい, 意地悪だ, 冷たい[9], 冷淡だ, 冷酷だ, 残酷だ」／4. 物事に対する態度の向けられる対象／5. 対人感情の向けられる対象＝相手「恥ずかしい[10], やましい, 済まない, 申し訳ない[11], 悪い」／6. 能力・特性の発現する対象「彼は歴史に強い[12], この植物は寒さに弱い[13], 鋭い, 鈍い, 明るい, 暗い, 詳しい[14], 疎い」／7. 相互的な関係の, 対比する対象「無関係だ[15], 無縁だ」／8. 比較の基準「同じだ[16], 等しい, そっくりだ, 紛らわしい」／9. 位置・距離関係の, 対比する対象「平行だ, 垂直だ, 遠い[17], 程遠い, 近い[18]」／10. 主観的な評価・判断を伴う性質・状態の基準「相応しい[19], 適当だ, 適切だ, 似合わしい, 似つかわしい, ぴったりだ, 恰好だ, 好適だ, 不向きだ, 不似合いだ, 不適當だ, 必要だ[20], 大切だ, 不可能だ, 不便だ」／11. 感情・感覚の主体／12. 内容規定／13. 目的規定「この川は浅いから子供が泳ぐのにいい[21]」／14. 原因「母は夕飯の支度に忙しい[22]」

IV. ト格：1. 関係の対象 1.1 対人関係の相手「睦まじい, 親密だ, 仲良した[23], 親しい, 近しい, 年頃だ, 懇意だ, 心やすい, 疎遠だ, 気まずい, 対等だ, 互角だ」／1.2 相互的な関係の, 対比する対象／1.3 比較の基準「同一だ, 同類だ, 共通だ, 別だ, 異質だ, あべこべだ, 逆だ, 裏腹だ, 反対だ[24], 正反対だ」／1.4 位置・距離関係の, 対比する対象／2. 量規定

V. デ格：1. 何かを満たす材料「いっぱいだ[26], ぎっしりだ, 満員だ[25], 満席だ, 満杯だ」／2. 原因「風邪で頭が重い[27], 夕焼けで空が赤い[28]」

VI. カラ格：1. 距離関係の対比される対象／2. 時間の基点「朝から寒い[29]ですね, 息子は小さい頃からぶきつちよな[30]んです」／3. 空間的な広がり of 基点「ここから勾配が急だ[31]」

VII. マデ格：1. 時間の限度「三時頃まで部屋は静かでした[32], 明日の午後まで風が激しい[33]でしょう」／2. 空間的な広がり of 限度「山は麓まで真っ白でした[34]」

VIII. ヨリ格：比較の基準「先月より[35]」(ほとんどの形容詞がこの結びつきを作る)

## 7. 研究方法

やはり聞き出しによる。コンサルタントは3節の表1で示した方々と同じである。

調査票として用意したのは下記の35文である。9節で詳しく述べるが、調査例文は大きく3つのグループに分けられる。ここではそのグループに分けて示しておく。

①人間が(感情, 感覚等の)経験主であるタイプの調査例文 ([12]を除く)

[1] この料理を作るのは簡単だ。／[2] あの人は字を書くのが早い。／[3] この問題は私には難しい。／[4] 昨日転んだ時の膝の傷が痛い。／[5] やっと治った傷の痕がかゆい。／[6] 私には彼のその言葉がとてもうれしかった。／[7] 今度来た先生は生徒に優しい。／[8] そんなことを言ったらこの人に失礼だ。／[9] この頃兄は私に冷たい。／[10] こんなことをしてしまって、私は学生たちに恥ずかしい。／[11] こんなことをしてしまって、本当にみんなに申し訳ないです。／[12] この草は寒さに強い。／[13] 女性より男性の方が痛みに弱い。／[14] 私の父はこの街の歴史に詳しい。／

②モノゴトの相互関係を示すタイプの調査例文（[22]と[26]を除く）

[15] これとそれとは全く無関係だ。／[16] この形はそれの形と同じだ。／[17] 私の家は駅から遠い。／[18] 私の家は駅に近い。／[19] この部屋には明るい色のカーテンがふさわしい。／[20] あなたには休養が必要だ。／[21] この紐は短いからこの小さい箱を縛るのにはいい。／[22] お母さんは今、晩御飯の準備で忙しい。／[23] うちの母は私の友達と仲がいい。／[24] 私の考えはあなたの考えと反対だ。／[25] さっきのバスは学生たちで満員だった。／[26] 彼は試験のことで頭がいっぱいだ。

③副詞項によるタイプの調査例文

[27] 風邪で頭が重い。／[28] 夕焼けで空が赤い。／[29] 朝から暑いですね。／[30] 私の息子は小さい時から体が弱い。／[31] ここから坂は急だ。／[32] さっきまではこの部屋は静かだった。／[33] 明日までは風が強いでしょ。／[34] 山はふもとまで白かった。／[35] 今は先月よりだいぶ寒い。

なお小矢野 (1985) で[15], [16] はそれぞれ「～に無関係」「～と同じ」と二格をとるものとして扱われていたが、筆者の判断で調査例文では「～と無関係」「～と同じ」に改変した。同様に[17], [22] はそれぞれ「～に遠い」「～に忙しい」と二格をとるものとして扱われていたが、筆者の判断で調査例文では「～から遠い」「～で忙しい」に改変した。

## 8. 研究結果と分析

### 8.1. 例文の提示方法

以下では調査結果として得られた対象言語の例文の提示方法を示す。なお調査結果の例文自体は、①②③の分析の各表の下に示した。

2 つ以上の対応表現が得られ、しかもそれが単なる語彙の違いなどではなく、本稿のテーマにとって看過できない重要なデータであった場合には、2 つ目以降のバリエーションを / の後ろに続けて示した。

まず形容詞は斜格名詞を取りにくいいため、**動詞を用いた表現が選択される**可能性がある。そこで形容詞述語（句）には囲み線を付け、動詞述語（句）は下線によって示した。名詞述語文となり、斜格名詞のない文であった場合には主題の語／句と述語の語／句を {} で示し、{} = {} のように示した。品詞の判断は各対象言語の辞書（竹内 (1989), 小沢 (1983), 油谷他 (編) (1993)) に拠った。

形容詞が**斜格の名詞項**を取っていた場合には、その斜格語尾もしくは付属語を斜字体の太字によって示した。代名詞が斜格に曲用している場合にはその代名詞全体を斜字体の太字とした。いずれについても、日本語訳の方でも格をハイフンで切り出し、格（と [代名詞+格]）を太字とした。これに対し、より句としての統語的な独立性が高いと思われる**後置詞による表現が用いられている**場合もある。そこで後置詞とみなせるものについては太字下線を付して示した。

トルコ語で現れる斜格は次の通りである：与格「～に」-(y)A（代名詞で現れているものは bana: 1SG, sana: 2SG）、具格「～で」-IA。なお異形態は本稿のデータをカバーできる範囲しか示していない。以下も同様である。

モンゴル語で現れる斜格は次の通りである：属格「～の」-yn/-ijn 与格「～に」-d, 具格「～で」-AAr, 奪格「～から」-AAs, 共格「～と」-tAj。

朝鮮語で現れる斜格は次の通りである：対格「～を」=ruur, 与格（無生）「～に」='oy, 与格（有生）「～に」='oygoy, 処格「～で」='oyso, 経路・方向格「～から／～へ」=ro, 共格「～と」=gwa, 並列格「～と」=hago, 時間的起点格「～から」=buto, 到達格「～まで」=ggaji, 比較格「～より」=boda。なお朝鮮語の格の名称は便宜的なものである。なお朝鮮語で漢字語の名詞が指定詞や存在詞と共に形容詞的意味の述語を形成している場合には、その漢字語を [ ] に入れて示した。

## 8.2. 分析

小矢野 (1985) では単に格助詞のみを基準に諸事態 (小矢野 (1985) のいう「結びつき」) を分類していたが、分析結果も踏まえて再度見直してみると、調査例文とした諸表現はおおまかに次の3つのグループに分類することが可能であると考えられる。

- ①[11]-[14]：人間が、感情や感覚、判断の主体 (以下ではこの主体を「経験主」と呼ぶ) になっているタイプ (ただし[12]の主体は「草」)
- ②[15]-[25]：モノゴトとモノゴトの相互的關係などを示すタイプ
- ③[26]-[34]：原因や時間／場所の起点／到達点など、述語を選ばず述語に支配されていない副詞的項によるタイプ

最後に[35]は比較の対象によるものであり、これは形容詞的意味の述語がもっとも自然にかつ特徴的に取ることのできる名詞項である。

したがって以下では [8.2.1. ①人間が経験主であるタイプ]、[8.2.2. ②モノゴトの相互關係を示すタイプ]、[8.2.3. ③副詞的項によるタイプ] の順に結果を対照言語学的に分析して行くことにする。なお便宜上[35]は 8.2.3.節で扱う。

### 8.2.1. ①人間が経験主であるタイプ

このタイプの述語は各言語において、無意志の経験主である人間の方を主語にしようとするか、感情や感覚を誘発する無生物の方を主語にしようとするか、両方のせめぎ合いの中でどちらかの表現の選択を迫られるものと考えられる。角田 (2009) の二項述語階層 [1 直接影響 > 2 知覚 > 3 追及 > 4 知識 > 5 感情 > 6 関係 > 7 能力] でも知識や感情は中間的な場所に位置している。

述語が示す行為自体は永続的なものではないが、動詞が示すような動作に比べれば一定の時間継続する行為であり、その行為が実現する時間の幅という観点からみても、動詞的にも形容詞的にも表現され得ると考えられる。

結果は言語によって明確に分かれる。表 2 に見るように、形容詞名詞型言語であるトルコ語とモンゴル語ではほとんどが人間を主語とする動詞によって表現され、朝鮮語と日本語では誘発主のモノゴトを主語とする形容詞によって表現される。

<sup>7</sup> ただし[12]の「草」が主語であるものもここで一緒に扱った。取り扱いが恣意的になるのを避けるためであり、モノゴトの相互關係ではないと考えたためでもある。ただこの調査例文については、人間を主語とした文にすべきだったと反省している。

表2：人間が経験主であるタイプの調査例文に対する対象言語における各表現

	日本語の調査例文の表現	トルコ語	モンゴル語	朝鮮語
[1]	～が簡単	N=A	N=A	TOP=A
[2]	～が早い	V	A	zero A
[3]	～に難しい	DAT A	V (/DAT A V)	DAT.A A
[4]	～が痛い	V	V	N=A
[5]	～がかゆい	V	V	N=A
[6]	～にうれしい	V	V	NOM=A
[7]	～に優しい	V	A <sup>prop</sup> / V	DAT.A A
[8]	～に失礼だ	DAT A <sup>Arab</sup>	V	DAT.A N
[9]	～に冷たい	V	V	V
[10]	～に恥ずかしい	V / DAT A <sup>Arab</sup>	V	DAT.A A
[11]	～に申し訳ない	V	V	DAT.A A
[12]	～に強い	DAT A <sup>prop</sup>	DAT A <sup>prop</sup>	DAT.I A
[13]	～に弱い	DAT A <sup>prop</sup>	N=[A V]	DAT.I A
[14]	～に詳しい	V	INS A <sup>prop</sup>	V

(=は名詞述語文, Nは名詞, Aは形容詞, Vは動詞, 朝鮮語の DAT.Aは与格(有生), DAT.Iは与格(無生)を示す, 他は Leipzig Glossing Rules に準ずる, 以下も同様である, なお上付き文字については後述する)

①人間が(感情, 感覚等の)経験主であるタイプの調査例文についての各対象言語の調査結果

[T-1] {Bu yemeği pişirmek} = {kolay}. 「この料理を作るのは簡単だ。」 / [T-2] O hızlı yazar. 「彼は早く書く。」 / [T-3] Bu problem bana zor. 「この問題は私に難しい。」 / [T-4] Dün düşüp dizimi yaraladım, hala acıyor. 「昨日転んで私の膝を怪我した, まだ痛んでいる。」 / [T-5] Yaram sonunda iyileşti ama kaşınıyor. 「私の傷はやっと治ったがかゆい。」 / [T-6] Ben onun sözlerine çok sevindim. 「私は彼の言葉にとてもうれしく思った。」 / [T-7] Yeni gelen hoca öğrencilere şefkatli yaklaşıyor/davranıyor. 「新しく来た先生は生徒たちに優しく接している/振舞っている。」 / [T-8] Öyle mi denir? Bu kişi-ye ayıp. 「そんな風に(疑)言うか? この人-に 恥ずかしい。」 / [T-9] Şu aralar abim bana soğuk davranıyor. 「この頃私の兄は私に冷たく振舞っている。」 / [T-10] Yaptığımdan dolayı öğrencilerime karşı utanç duyuyorum. 「私のしたことのために学生たちに対して恥ずかしさを感じている。」 / Böyle bir şey yapmış olmaktan ötürü öğrencilerim-e mahcubum. 「こんな(不定)ことをしてしまったことから(その)ために学生たち-に私は恥ずかしい。」 / [T-11] Yaptığımdan ötürü herkesden özür dilerim. 「やったことから(その)ためにみんなから許しを私は願う。」 / [T-12] Bu ot soğuş-a dayanıklı. 「この草は寒さ-に持ちこたえる。」 / [T-13] Erkekler acı-ya kadınlardan daha az dayanıklı. 「男たちは痛み-に女たちよりより少なく耐える。」 / [T-14] Benim babam bu şehrin tarihini iyi bilir. 「私の父はこの街の歴史を良く知っている。」

[M-1] {ene xoolyg xijx} = {amarxan}. 「この料理を作るのは簡単だ。」 / [M-2] ter xün üseg biçixdee xurдан. 「あの人は字を書く時に早い。」 / [M-3] ene daalgavar nadad xünddež bajna. 「この課題は私には困難になっている。」 / 次の文も可能だが, 前者がより分かりやすいという. ene daalgavar nada-d xünd bajna. 「この課題は私-に難しくある。」 / [M-4] öcigdör unaxdaa şalbalsan övdögnij şarx övdöz bajna. 「昨日転

んだ時に 擦りむいた 膝の 傷が 痛んで いる。」／[M-5] araj gež edgesen šarxny maan' sorvi zagatnaad bajna. 「やっとの ことで 治った 傷の (私の) 痕が かゆくなっている。」／[M-6] Ternij xelsen ügijg sonsood bi maš ix bajarlasan. 「彼の 言った 言葉を 聞いて 私は とても 大きく 喜んだ。」／[M-7] šineer irsen bagš sajxan aaštaj. 「新しく 来た 先生は 優しい 性格だ。」 / šineer irsen bagš suragčiddaa sajxan xanddag. 「新しく 来た 先生は 生徒に 優しく 向き合っている。」／[M-8] Ijm üg xelbel jos aldsan xereg bolno. 「こんな 言葉を 言ったら 礼を 失った ことになる。」／[M-9] Süülijn üjed ax maan' nadad xüjten xandax bolson. 「この 頃 兄は (私の) 私に 冷たく 向き合うようになった。」／[M-10] Ijm züjl xijčixsen gež bodoxoor suragčdaasaa ünexeer ičiz bajna. 「こんな ことを してしまったこと となったので 学生たちに 本当に 恥じて いる。」／[M-11] Ijm züjl bolsond namaĵg ünexeer uučlaaraj. 「こんな ことになって 私を 本当に 許してください。」／[M-12] Ene urgamal xüjten-*d* maš tesvertej. 「この 草は 寒さ-に とても 耐えられる。」／[M-13] {Emegtej xünees ilüü eregtej xüniĵ övdölt tesverlex čadvar} = {muu bajdag}. 「女の 人よりもっと 男の 人の 痛みに 耐える 能力が 悪く ある。」／[M-14] Manaj aav ene xotyn tüüxijn tal-*aar* maš ix medlegtej. 「うちの 父は この 街の 歴史の 方面-をめぐって とても 良く 知っている。」

[K-1] {i 'yorirur mandu=nun gə=n} {sui'wə'yo}. 「この 料理を 作る ことは 簡単だ。」／[K-2] gu saram'un gurjarur ssunum gəy=Ø bbarra'yo. 「あの 人は 字を 書く ことが 早い。」／[K-3] 'i munjəynun jə='ygyəy=nun 'oryə'wə'yo. 「この 問題は 私-に-は 難しい。」／[K-4] {'əjəy nəm'əjəss'ur dday dacin murup'i} {apa'yo}. 「昨日 転んだ 時 怪我した 膝が 痛い。」／[K-5] {gyə'u na'un sangcəga} {garyə'wə'yo}. 「やっ と 治った 傷が かゆい。」／[K-6] {jə'ygyəynun gu saram'uy gu mar='i} {jəngmar gibböss'ə'yo}. 「私には その 人の その 言葉-が 本当に うれしかった。」／[K-7] 'ibən'əy 'osin sənsayngnim'un hagsayngdur='ygyəy cincərhay'yo. 「今度 いらした 先生は 生徒たち-に 親切だ。」／[K-8] gurən mar'ur hamyən 'i saram='ygyəy [sirryəy]'yəy'yo. 「そんな 言葉を 言ったら この 人-に 失礼だ。」／[K-9] hyəngum 'yojum jə=*rur* cagabgəy dayhay'yo. 「兄は この 頃 私-を 冷たく 扱う。」／[K-10] 'irən jis'ur haysə hagsayngdur='ygyəy buggura'wə'yo. 「こんな ことを して 学生たち-に 恥ずかしい。」／[K-11] 'irən jis'ur haysə modu='ygyəy jəngmar joysonghay'yo. 「こんな 振る舞いをして みんな-に 本当に 申し訳ないです。」／[K-12] 'i pur'un cu'wi='y gənghay'yo. 「この 草は 寒さ-に 強い。」／[K-13] 'yojaboda namjaga gotong='y yaghay'yo. 「女性より 男性が 痛み-に 弱い。」／[K-14] 'uri 'aboĵinun 'i maur 'yəgsarur jar 'ar'a'yo. 「うちの 父は この 街の 歴史を よく 知っている。」

全体の傾向に反する点を中心に個別の例について説明を加えておく。まず[1]は一種の対照実験として調査例文を「私にとってこの料理を作るのは簡単だ。」のように経験主を持つ文にせず単に「この料理を作るのは簡単だ。」とした。ここでは3言語とも述語に形容詞を選択した。モンゴル語の[2]では形容詞による表現が示されたが、与格句は *ter xün üseg bičix-d-ee* 「あの人は字を書く時に」という任意の副詞的な項であり、*xurda* 「早い」が支配している項とは言い難い。

モンゴル語の[7]の形容詞は斜格名詞項を取らない構文に再構成された中で用いられている。トルコ語の[8], [10]の形容詞はアラビア語からの借用語である(アラビア語からの借用語は表中では上付きの Arab (X<sup>Arab</sup>) で示した)。ユーラシア言語研究コンソーシアムの2024年度年次総会で本稿の草稿を発表した際に菅原睦氏より ait 「形 ~に関する, ~に属する, ~のための, ~にかかわる *bu bana ait bir konu*. これは私の問題だ。(以下略)」(竹内(1989: 10)) について、与格の名詞を支配する旨のコメントをいただいたが、この語も上記竹内(1989)の辞書にはアラビア語からの借用語として記載されている。アラビア語から借用した形容詞であればなぜ斜格名詞項を支配しやすいか、という理由のようなものは見いだせていないが、少なくともこれらの例がチュルク本来の形容詞によるものではないことに注意すべきで

あろう。

[12]はまず元の文が無生物主語「草」である。次に、トルコ語の形容詞は *dayanık-lı*「持ちこたえる (< *dayanak* + -II : 支え-PROP)」, モンゴル語の形容詞は *tesver-tej*「我慢強い (< *tesver* + -tAj : 我慢-PROP)」といずれも Proprietary によって派生した形容詞となっている (表中では上付きの prop (X<sup>prop</sup>) によって示した)。すでに述べたように両言語の Proprietary の接辞は句をスコープとする統語的派生接辞としての性格を有している。派生元が動詞であるというわけではないので、直接このことが斜格名詞項を支配できる理由とはならないが、統語的に広いスコープを持つ述語であることはやはり考慮すべき点であると考えられる。

このように人間が経験主である①のタイプにおいて、形容詞名詞型であるトルコ語とモンゴル語では形容詞述語を避け動詞述語を選択する強い傾向が観察される。これに対し形容詞動詞型の朝鮮語では[9]と[14]で *cagabıgoy dayhay'yo*「冷たく 扱う」, *jar 'ar'a'yo*「よく 知っている」と動詞表現が使われたのみであり、それ以外では形容詞述語が普通に用いられ、しかも[3][7][8][10]-[13]では斜格名詞項を支配していることがわかる。

### 8.2.2. ②モノゴトの相互関係を示すタイプ

このタイプになると、トルコ語とモンゴル語でも形容詞が斜格項を支配する表現がふつうに観察される (表中では下線を付して示した)。したがって両言語の形容詞に斜格項を支配する力がないわけではないということがわかる。朝鮮語ではやはりこのタイプにあっても形容詞による斜格項の支配がみられる。

表3: モノゴトの相互関係を示すタイプの調査例文に対する対象言語における各表現

	日本語の調査例文の表現	トルコ語	モンゴル語	朝鮮語
[15]	～と無関係だ	N NE	<u>COM A</u>	COM Existential
[16]	～と同じだ	<u>DAT A / DAT A</u>	<u>COM A</u>	COM A
[17]	～から遠い	<u>DAT A</u>	<u>ABL A</u>	ABL A
[18]	～に近い	<u>DAT A</u>	<u>COM/ABL A</u>	ABL A
[19]	～にふさわしい	V	V / <u>DAT A<sup>prop</sup></u>	V
[20]	～に必要なだ	N=A / <u>DAT A<sup>Arab</sup></u>	N=A <sup>prop</sup>	Existential/ DAT A
[21]	～にいい	POST A	V	DAT.I A
[22]	～で忙しい	V	A V	CVB.PURP A
[23]	～と仲がいい	INS {N A}	<u>COM A</u>	COM2(hago) A
[24]	～と反対だ	<u>DAT A<sup>Arab</sup></u>	N=A V / <u>ABL A</u>	COM N/A
[25]	～で満員だ	<u>INS A</u>	AN	INS N

(NE は nonexist, Existential は存在詞, POST は後置詞もしくは後置詞的表現を示す)

### ②モノゴトの相互関係を示すタイプの調査例文に対する各対象言語の調査結果

[T-15] {Onunla bunun hiçbir alakası} {yok}. 「それと これの いかなる 関係 (も) ない。」 *alaka* (アラビア語からの借用, 名詞) / [T-16] {Bu şekil} = {onun-la aynı şekil}. 「この 形は それ-と 同じ 形だ。」 / *Bu şekil o şekil-le aynı*. 「この 形は その 形-と 同じだ。」 / [T-17] *Benim evim istasyon-a uzak*. 「私の 家は 駅に 遠い。」 / [T-18] *Benim evim istasyon-a yakın*. 「私の 家は 駅に 近い。」 / [T-19] *Bu odaya açık renkli perdeler iyi gider*. 「この 部屋に うすい 色の カーテンが 良く 合う。」 / [T-20] {Senin dinlenmen} = {gerek}. 「君の 休養が 必要だ。」 / *Sana tatil lazım*. 「君に 休みが 必要だ。」 / [T-21] *Bu ip kısa olduğu için bu küçük*

kutuyu bağlamak için yeterli. 「この紐は短いのであるのでこの小さい箱を縛るために適している。」／[T-22] Annecim şu an akşam yemeğini hazırlıyorum. 「おまえのお母さんはこの時晩御飯に準備しているのよ。」／[T-23] Benim annemin arkadaşlarım-la arası iyi. 「私の母の私の友達と(の)仲はいい。」／[T-24] Benim fikrim senin fikrin-e zıt. 「私の考えはあなたの考えに逆だ。」／[T-25] Deminki otobüs öğrenciler-le dolu=ydu. 「さっきのバスは学生たちで満員だった。」

[M-15] Ene züj] naaduul-taj čin' jamar č xamaagüj. 「このことはあれと(おまえの)何も関係ない。」／[M-16] Enenij xelber naadaxyn čin' xelber-tej adilxan. 「この形はそれの(おまえの)形と同じだ。」／[M-17] Manajx mjetrony buudl-aas xol. 「私の家は地下鉄の駅から遠い。」／[M-18] Manajx mjetrony { buudal-taj / buudl-aas } ojr(xon). 「私の家は地下鉄の{駅と / 駅から}近い。」(なお与格は使えないという)／[M-19] Ene öröön-d gegeeleg öngijn xöšig ilüü { zoxino / toxiromžtoj / zoximžtoj }. 「この部屋に明るい色のカーテンがよりふさわしい。」(zoximžtoj / toxiromžtoj は書き言葉的な形式で、ふつうに話す時には zoxino を用いるという)／[M-20] { Amrax } = xeregtej šüü. 「休養が必要だよ。」／[M-21] Ene ujaa boginoxon boloxoor naad žižig xajrcgijg čin' booxod jag taarna. 「この紐は短いのでこの小さい箱を(おまえの)縛るのにちょうど適している。」／[M-22] Eež odoo orojn xool xijgeed zavgüj bajna. 「お母さんは今、晩御飯を作ってヒマなくしている。」／[M-23] Manaj eež, manaj najz xojor maš dotno. 「うちの母(と)私の友達二人はとても仲がいい。」／Manaj eež manaj najz-taj maš dotno. 「うちの母は私の友達ととても仲がいい。」(どちらも同じぐらい自然であるという)／[M-24] { Či bid xojoryn bodol } = esreg bajna. 「あなた(との)私たち二人の考えは反対だ。」/Bi činiyx-ees esreg bodoltoj bajna. 「私はあなたのから反対の考えを持っている。」(どちらも同じぐらい自然であるという)／[M-25] Sajany avtobus { düüren } ojuutan-taj bajsan. 「さっきのバスはいっぱい学生が乗っていた。」

[K-15] 'igəs=gwa guğəs'un jønhyo [sanggwan]'obs'ə'yo. 「これとそれは全く関係がない。」(存在詞)／[K-16] 'i moyang'un guğəs=gwa gat'a'yo. 「この形はそれと同じだ。」／[K-17] 'uri jib'un 'yog='əysə mər'ə'yo. 「うちの家は駅から遠い。」／[K-18] 'uri jib'un 'yog='əysə gagga'wə'yo. 「うちの家は駅から近い。」／[K-19] 'i bang'əynun barg'un sayg kötun'i jar 'ə'urryə'yo. 「この部屋には明るい色(の)カーテンがよく調和する。」／[K-20] dangsin'un swir pir'yoga 'iss'ə'yo. 「あなたは休む必要がある。」(存在詞) / dangsin='əigəy=nun hyusig'i pir'yohaj'yo. 「あなたに-は休息が必要だ。」／[K-21] 'i ggün'un jjarb'aso 'i jag'un sangjarur mugggi='əy=nun joh'a'yo. 「この紐は短くてこの小さい箱を縛る-にはいい。」／[K-22] 'əməninun jigum jənyəgür junbihasinura babba'yo. 「お母さんは今、晩御飯を準備なさろうと忙しい。」(目的の接続形式)／[K-23] 'uri 'əməninun jəi cingu=hago cinhaj'yo. 「うちの母は私の友達と親しい。」／[K-24] jəi saingag'un dangsin=gwa [bandai]'yoi'yo. / darra'yo. 「私の考えはあなたと反対だ(違う)。」／[K-25] jogum jən'ui bəsunun haigsaingdur=ro [manwon]'i'əss'ə'yo. 「ちょっと前のバスは学生たちで満員だった。」

全体的な傾向に反する点を中心に個別の例について説明を加える。まず[22]は調査例文で人間が主語となっている。後続部分は「晩御飯の準備で忙しい」であり、経験主の人間は何らかの動作行為を行っている。おそらくはそのためトルコ語でもモンゴル語でも動詞述語が用いられている。この例文では対象言語でも人間が主語となっていて、どの言語にも形容詞による斜格名詞支配の表現は観察されない。

以上表3にみるようにやはり人間主語では避けられるものの、モノゴトの相互関係を示すタイプでは対象言語のいずれにおいても形容詞による斜格名詞支配の表現が観察できることがわかる。

## 8.2.3. ③副詞項によるタイプ

このタイプではトルコ語とモンゴル語の間に違いが現れる。トルコ語では 2/3 の表現で形容詞述語が使える。ただし斜格名詞項を支配しているわけではなく、(それ自身が斜格名詞を支配している) 後置詞句が独立性の高い副詞句として用いられている。後置詞は *beri* 「～以来, ～からこちら」, *kadar* 「～ほど, ～ぐらい, ～だけ, ～ような, ～まで, ～までに, ～以内に」などで, *kadar* はアラビア語起源である (竹内 (1989) による)。

これに対しモンゴル語では, このように理由や場所, 時間が限定される場合にも形容詞を避け動詞による表現を好む。特に時間が限定される場合 ([29][30][32][33][35]) には, 形容詞が現れるものの, 形容詞で文を終えることが難しくなり, *baj-* 「～である, ある」, *bol-* 「なる」などのコピュラ類の動詞の助けを借りて文を終結しようとする (表中ではこうしたコピュラ類の動詞に下線を付した)。この点は 2.2 節でみたように Kullmann and Tserenpil (1996) が指摘していたとおりである。

朝鮮語においてはこのタイプの諸表現においても安定して形容詞述語が用いられる。

表 4: 副詞項によるタイプの調査例文に対する対象言語における各表現

	日本語の調査例文の表現	トルコ語	モンゴル語	朝鮮語
[26]	～でいっぱいだ	N=N-LOC / <u>INS A<sup>Arab</sup></u>	V A	V
[27]	～で重い	V	V	POST A
[28]	～で赤い	POST A <sup>Arab</sup>	V	INS A
[29]	～から暑い	POST A	POST A <u>V</u>	T.ABL A
[30]	～から弱い	POST A	GEN/ABL A <sup>PROP</sup> <u>V</u>	T.ABL A
[31]	～から急だ	V	ABL A <u>V</u>	T.ABL A
[32]	～まで静かだった	POST A	V N <u>V</u>	[till] A
[33]	～まで強い	V	V A <sup>PROP</sup> N <u>V</u>	[till] A
[34]	～まで白い	POST A	V	[till] A
[35]	～より寒い	POST A	ABL A <u>V</u>	[than] A

(朝鮮語の =ggaji 「まで」, =boda 「より」 はそれぞれ [till], [than] というタグ付で示した)

## ③副詞項によるタイプの調査例文に対する各対象言語の調査結果

[T-26] {Onun akli} = {sınavda}. 「彼の 心は 試験に (ある).」 Onun akli sınav-*la* meşgul. 「彼の 心は 試験で 使用中だ」? Onun akli sınav-*la* dolu. / [T-27] Nezleyim, başım ağrıyor. 「風邪をひいた, 私の頭が 痛む。」 / [T-28] Gün batımının etkisiyle gökler kırmızı. 「日の 入りの せいで 空が 赤い。」 / [T-29] Sabahtan beri sıcak. 「朝-より この方 暑い。」 / [T-30] Benim oğlum küçüklüğünden beri zayıf. 「私の 息子は 小さい時-より この方 弱い。」 / [T-31] Burdan itibaren yokuş dikleşiyor. 「ここから 先 坂は 急になっている。」 / [T-32] Az öncesine kadar bu oda sessiz=di. 「ちょっと 前 まで この 部屋は 静かだった。」 / [T-33] Yarına kadar şiddetli rüzgar esecek/eseceği öngörülüyor. 「明日 まで 激しい 風が 吹くことが 予想される。」 / [T-34] Dağ, eteğine kadar beyaz=di. 「山は, ふもと まで 白かった。」 / [T-35] Şimdi geçen aya göre epey soğuk. 「今は 先月 に比べ かなり 寒い.」

[M-26] Ter şalgaltaa bodood uxaan alga. 「彼は 自分の試験のことを 考えて 感覚がない。」 / [M-27] Xaniadnaas bolood tolgoj düüreed bajna. 「風邪から なって 頭が 重くなって (一杯になって) いる。」 / [M-28] Žargax naryn tujaand tengerijn xajaa ulaan xaragdaž bajna. 「沈む 日の 光に 空の 下部 (地平線) が 赤

く見えている。」／[M-29] Öglöönöös exleed l xaluun bajna šüü. 「朝から始まってずっと暑いですね。」(Öglöönöös xaluun bajna šüü. とすると「朝より(今が)暑いですね」の意味になる, すなわち形容詞の前の奪格名詞は比較の対象となる)／[M-30] a. Manaj xüü { bag-yn / bag-aas-aa } l bije muuta bajsan. 「うちの息子は {小さいの / 小さい時-から-自分の} ずっと体が弱い のだった。」／[M-31] Endees exleed zam maš ögsüür bolno. 「ここから始まって道は とても急になる。」/End-ees zam maš ögsüür bolno. 「ここ-から 道は とても急になる。」／[M-32] Sajaxnyg xürtel ene öröö nam güm bajsan. 「さっきまでこの部屋は静かだった。」／[M-33] Margaašyg duustal salxi xüčte xeveer bajx bajx. 「明日を終わるまで風が強い状況であるだろう。」／[M-34] Uul casaar бүтэн xučigdsan bajsan. 「山は雪で全部覆われていた。」／[M-35] Odoo bol ömnöx sar-aas xamaagüj xüjten bolood bajna. 「今は先月-よりだいぶ寒くなっている。」(bolood bajna なしでも言えなくはないが, 何か足りない感じがする, もしくはさらに話が続くような感じがするという)

[K-26] gu saram'un sihom saingag'uro möriga gwgag ca 'iss'ǵ'yo. 「あの人は試験(の) 考えて頭がいっぱいに満ちている。」／[K-27] gamgi ddaimun'ǵi möriga mugǵ'wǵ'yo. 「風邪(の) せいで頭が重い。」／[K-28] jonyogno'ur=ro hanur'i bbargai'yo. 「夕焼け-で 空が 赤い。」／[K-29] 'acim=butǵ dobnoi'yo. 「朝から暑いですね。」／[K-30] joi 'adurum 'örir ddai=butǵ momi 'yaghaj'yo. 「私の息子は小さい時-から体が弱い。」／[K-31] 'yögi=butǵ gyöngsaga gubhai'yo. 「ここ-から 傾斜が急だ。」／[K-32] 'i bang'un jogum jon=ggaji=nuun jo'yonghaiss'ǵss'ǵ'yo. 「この部屋はちょっと前-まで-は静かだった。」／[K-33] nai'ir=ggaji=nuun baram'i soigoi bur go'yoi'yo. 「明日-まで-は風が強く吹くでしょう。」／[K-34] sangisurg=ggaji hayaiss'ǵ'yo. 「山のふもと-まで 白かった。」／[K-35] jigum'un jinandar=boda ggwai cu'wǵ'yo. 「今は先月-よりだいぶ寒い。」

[26]は調査例文で人間が主語となっている。トルコ語の[26]を除き(主語は Onun aklı「彼の心」), この例文では対象言語でも人間が主語となっていて, どの言語にも形容詞による斜格名詞支配の表現は観察されない。

## 9. II 部のまとめ

下記の4点が明らかになった。

- ①形容詞名詞型のトルコ語, モンゴル語では, 特に人間名詞が主語の場合, 形容詞による斜格名詞項の支配は避けられ, 動詞述語を用いる傾向がある。形容詞動詞型の朝鮮語ではそうではない。なお本稿の対象言語ではないが, 元の調査例文にみるように, (いわゆるイ形容詞が) 形容詞動詞型の日本語でもそうではない。
- ②モノゴトの相互的な関係の場合にはトルコ語, モンゴル語でも形容詞による斜格名詞項の支配が観察できる。
- ③述語の種類を問わない副詞項が修飾する場合にも, トルコ語, モンゴル語には形容詞述語を避ける傾向がある。特にモンゴル語では, 時間的な限定がある場合に形容詞述語で文を終えることが避けられ, コピュラ類の動詞が加えられる。
- ④I 部ではモンゴル語とトルコ語の形容詞述語に斜格名詞項の支配に関する違いが観察されたが, II 部における包括的な分析では, 両言語の形容詞述語に斜格名詞項の支配にはそれほど大きな違いはないことがわかった。

## 10. I 部と II 部の全体に関するまとめと議論

### 10.1. I 部と II 部のまとめ

II 部での分析の結果、モンゴル語とトルコ語の両言語は形容詞述語に斜格名詞項の支配においてそれほど大きな違いを見せないことがわかった。したがって I 部における結論①の根拠 2. もあまり妥当ではないということになる。ただモンゴル語では現在もなお文語的な表現に観察される *bögööd* の使用という点に関して、いわば通時的な残存という形で名詞述語と形容詞述語の間には若干の違いがある。ただこれを「述語性」の違いとみるべきかどうかについてはさらなる議論が必要であろう。

### 10.2. 議論と仮説

もし岡田・向井 (2006) の言うように「モンゴル語で名詞を修飾している形容詞は、修飾語成分ではなく、あくまでも名詞述語文（措定文）が連体節になったものと見なす」ならば、それは述語性の高い「節」ということになる。そこでコンサルタントから I 部の形容詞の並列や過去に関する文を実際に聞き出して調べてみたところ、特に口語表現においてそれほど形容詞の述語性は高くないことがわかった。II 部でみた斜格名詞の観点からもやはり形容詞の述語性はあまり高くないことがわかった。したがって形容詞述語の述語性は岡田・向井 (2006) の言うような動詞述語と同等にみなせるほど高い述語性を持つものとは言えないと考える。

ここで本稿では下記のような 2 つの仮説を提示する。

【仮説 1】アルタイ型言語において、節と句は連続的である。

【仮説 2】形態的基準に基づく動詞／形容詞／名詞の品詞の区別を持つ言語においては、動詞>形容詞>名詞、の順で述語性／節性は弱くなる。

このうちまず【仮説 1】は菅野 (1990: 345-346) で「朝鮮語が西欧語のような重文と複合の厳密な区別をしえない言語であり、また関係代名詞の欠如により節と句の区別があいまいな言語であるという特徴は、その語順とともに日本語その他のアルタイ諸言語と全く同じである」と述べられていることを再評価し再度ここでとりあげるものである。この主張は欧米中心に発達して来た言語学が通言語的に当然のこととしている「節と句の区別」に対して異を唱えるものである。この仮説を証明して行くためには今後多くの言語について実証的なデータ収集と分析を重ねていく必要があるだろう。本稿はそのプロセスの第一歩目に過ぎない。

次に【仮説 2】は動詞述語、形容詞述語、名詞述語が実現する行為／状態の生じる時間的な長さなどから考えてある意味では当たり前のことなのかもしれない。しかしその具体的な実現の様相については本稿で行ったようなデータ収集と分析の積み重ねが必要であると考えられる。

上記 2 つの仮説の妥当性を解明するためには、今後さらに次のような課題に取り組んでいく必要があると考えている。

【課題 1】アルタイ型言語間において、[動詞の形動詞形＋コピュラ類の動詞] によって構成される複合時制やモダリティ、証拠性を対照する。

【課題 2】本稿で検討したような名詞述語・形容詞述語の述語性の現われについて、ツングース諸語や他のアルタイ型言語（ドラヴィダ諸語、ケチュア諸語、ウラル諸語、チベット・ビルマ諸語）における対照研究を行う。

【課題 1】については若干の説明が必要であろう。動詞の形動詞形は準動詞の一種であり、定動詞形よりも述語性が落ちるものと考えられる。実際に、例えばトルコ語において形動詞形を文の諸要素とし

て用いる際にコンピュータ類の動詞が用いられるとする記述がある（林（2013: 197-198, 228, 231-232, 249-251）. 形容詞名詞型言語における形動詞形は実詞的（名詞・形容詞的）性格を持つと考えられる（風間（2022: 423-450）も参照されたい）. したがって特に形容詞名詞型のアルタイ諸言語において，形動詞形の述語的性格を分析することが必要であると考ええる.

[謝辞]

時間を割いて面倒な例文の翻訳をしてくださったコンサルタントの方々に深くお礼申し上げたい. 査読者からも貴重なコメントをいただいた. 記して感謝申し上げたい. ただし本稿におけるいかなる誤謬も筆者の責に帰するものである.

### 参考文献

- Göksel, A. and C. Kerslake. 2005. *Turkish. A comprehensive grammar*. Routledge, London.
- 林徹. 2013. 『トルコ語文法ハンドブック』東京：白水社
- Janhunen, J. 2012. *Mongolian*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 菅野裕臣. 1990. 「朝鮮語—その系統論以前の諸問題」『日本語の形成』東京：三省堂
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人（共編）. 1988. 『コスモス朝和辞典』東京：白水社
- 風間伸次郎. 1996. 「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について」『*Altai Hakpo*』9: 93-124.
- 風間伸次郎. 2022. 「日本語の類型について」『日本語の類型』29-45. 東京：三省堂
- 小矢野哲夫. 1985. 「形容詞のとり格」『日本語学』vol. 4-(3)
- Kullmann, R. and D. Tserenpil. 1996. *Mongolian Grammar*. Hong Kong. Jenso. ltd.
- 岡田和行・向井晋一. 2006. 「東外大言語モジュール」連体節と形動詞形，形動詞形（1）／名詞節（2）  
[解説]・重文（1）並列／同位成分の接続（1）並列  
(<https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/steplist.html>) 最終閲覧日：2025/12/29.
- 小沢重男. 1983. 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林
- Sohn, H. M. 2004. The Adjective Class. Dixon, R. M., & Aikhenvald, A. Y. (Eds.). *Adjective classes: A cross-linguistic typology*. OUP Oxford.
- 竹内和夫. 1989. 『トルコ語辞典』東京：大学書林
- 角田太作. 2009. [初版 1991] 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎（編）. 1993. 『朝鮮語辞典』東京：小学館・韓国金星出版社（共編）
- 渡辺己. 2012. 「スライアモン・セイリッシュ語の品詞分類について」影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の新展望③ 語彙と品詞』99-121. 東京：くろしお出版

執筆者連絡先：kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理：2025年12月29日

刊行年月日：2026年3月31日